

レイテ島における記録と戦友たち

伊藤 和市

あまりにも悲惨で残酷過ぎたレイテ戦。オルモック東北方の背梁山脈の叢林（木が集まって繁った林）のけもの道のそばや叢林の中に相当まとまった数の兵がいた。私たちがその前を通過する時、我が第四野病の西山上等兵がいるではないか。彼の方が早く気づき声をかけた。

西山は私の無二の親友である。私たちの部隊もこのあたりで休憩することにし、出野曹長と私が代表として第一半部の状況を聞きに行った。本隊の一半部の状況聞きに行った。本隊の一半部は副官松田大尉がバレンシヤ付近で片腕切断の重傷のため、オルモックまで担送してきたこと、すぐ本隊のいる位置へ戻れば良かったのであるが、食糧のあるオルモックで栄養補給と休息をしていた時、まだ敵の上陸していないセブ島から来た三十五軍

の参謀につかまり、いやおうなしに戦線離脱兵とされ、各隊混合の斬込み隊に編入され今夜半斬込みに行くそうである。

西山を我が部隊へ返してくれたと隊長に千秋中尉が懇願したが無駄であった。一生かかっても得がたき良き戦友とこの山中で偶然に会い、そして別れて行かなければならない非情な運命である。彼も斬込み隊なら私たちも死地へ向かうようなもの。だが私たちが死への距離は遠かった。彼は貴重品のごとく、大切な斬込み隊員にのみ支給された戦勝豆を私にくれた。彼の両手をしっかりと握りしめ思わず固く抱き合ったまま無言で別れを惜しんでいた。彼の顔も私の顔も涙でぐしゃぐしゃになっていた。そして我々が去っていく姿を棒立になつたまま見えなくなるまで見送っていた。

これが彼との永遠の別れとなつてしまったのである。

白骨街道

私たちが最初ダガミからオルモツクへと道なき道は、十六師団將兵の退避路のごとくになっただガミへ向かう兵は、私たち部隊以外に全くない。牛が屠殺場へ引かれていくような気持ちで足どりも重たかった。向かって来る兵は「オルモツクは近いですか。」「食糧はありますか。」と決まったように尋ねて行った。そがいが横たわっていた。熱帯の太陽熱のため早く白骨化したもの、腐りかけた死臭のぷんぷんする死体、黒色のしけ虫のような、うじ虫のようなものが、眼や鼻口と黒々と群がり出入りして全く正視出来ず、顔をそむけたくなるようなむごたらしい死体がごろごろしていた。また、谷川には必ずといつていいほどの死体が水の中へ上半身を突っ込んだまま息絶えていた。路傍にはこじきのごとく「何か食べるものを恵んでください。」と哀れな声を出している兵がいたるところにいた。中には

十円札をひらめかせ、「これで何か食べるものを売ってください」と哀願している兵もいる。こんな地獄のごとき道を歩まなくてはならない。ダガミへダガミへと。

父母、妻子、兄弟姉妹と肉親の無事を祈りながら次々と倒れていったのである。

どうか戦友たち、安らかに眠って下さい。私もレイテ島慰霊の旅に三年続けて参加してごめい福を祈ってきました。合掌

（元第十六師団野戦病院 衛生兵長）